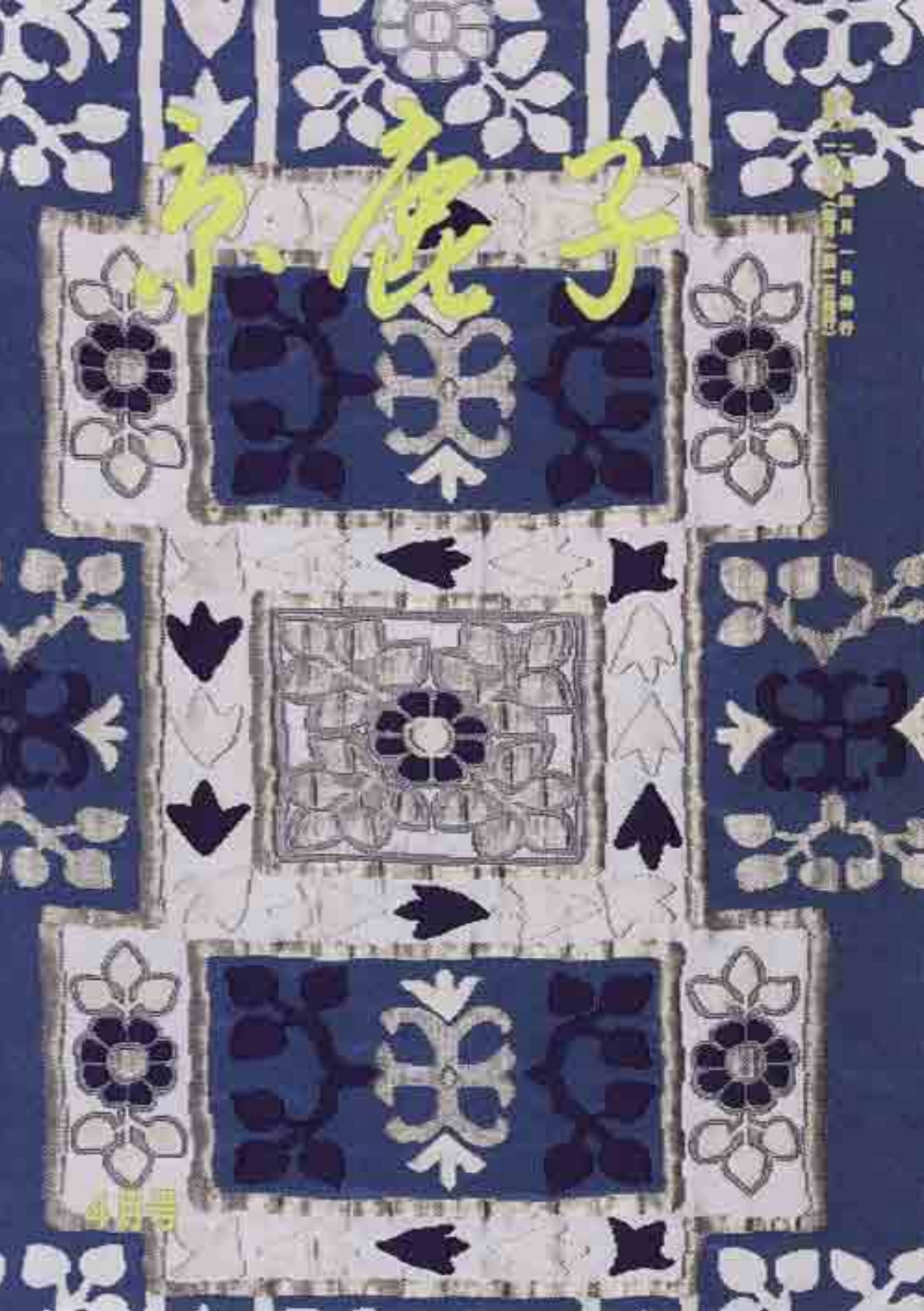


# 市鹿子

鹿子市



鈴鹿呂仁  
拾掬集 その五十五

雪解の風を翼に大地踏ま

風を脱ぎ日を零したる雪解村

双眸に余寒の湖の淡海かな

余寒なほ階高き華頂山

亀鳴くや言はずもがなの悔いひとつ

花おぼろ結ひ目を解くわだかまり

満願の受験子の絵馬空翔ける

落し角夫に笑くぼの二つあり

童わらんべのあっけらかんと蝌蚪の空

蛇穴を出て園内放送頻り

神籬ひもろぎの形は崩さず春しぐれ

社家町の土塀は低し水温む

社家門の小橋驕らず東風の空

神域の芝一面の芽吹き空



近詠

鈴鹿 仁



梅東風

梅東風や孤高の絵馬のをどり出す  
京ことば巧みに使ひすぐき店  
梅匂ふ賀茂のしじまの詩ごころ  
引く波に思ひのあれど桜貝  
水仙忌嗟峨野歩けば杖の音

近詠

和田 照海



おぼろ月

狐火やうぶすな闇の深き杜  
父祖よりの荒砥の反りや春隣  
ふるさとや今も昭和の鶏合  
京言葉モザイクがけに牡丹雪  
鬼泣いて了る遊びやおぼろ月

松本 鷹根



塩貝 朱千

立 春

抜歯後の遠瞬きや冴え返る

山茶花の散り継ぐ和み両隣

蠟梅は陽を溜めお地蔵瞑想す

堀つたふ猫振り向きて春めけり

快晴の眺望今日は立春だ

## 近 詠

木洩れ日

初東風や人は水音に誘はるる

初髪の娘にゆづらるる木の小橋

神木の木洩れ日揺らし寒鴉

夕雲の裏は茜に辛夷の芽

春嵐神馬の敏き耳動く

## 英華採集

短日や大空を掃く竹百幹

月ヶ瀬 上田 由姫子

京都嵯峨野の竹林あたりを吟行しているのだろうか？見る場所が多い嵯峨野だと冬の時は、夕暮れが早く来るので、小路に入ると方向感覚がずれて迷うことがある。今まで晴れていて明るかった場所の景色が一変したことを竹林の竹が空を掃いた、と比喻した表現に興味を湧く。季語の「短日」が効果を上げていて、「竹百幹」の下五の結びも収まっている、と言える。

一人来て一席動くおでん屋台

戸 田 遠山 悟史

赤提灯のおでん屋さんだろうか？作者の行き付けのお店に違いない。空いている時は常連さんは、必ず座る場所は同じである。ところが、二人連れ、三人連れ、と混んでくると一人分を融通することになり横へ移動することがある。一人が来たことによる一期一会の会話が弾むキッカケが生まれることもある。酔いが心を許す日本人の国民性が表れる面白い舞台設定となる「おでん屋台」が良い。

湯豆腐や掴み損ねるイエスマン

船 橋 元橋 孝之

「NO!」と言えない日本人」というキャッチフレーズが流行した時期があった。サラリーマン社会に重ねてみると上司と部下の関係が思い当たる。飲み会での一場面を想像すると面白いが部下の方は大変である。下手に相槌を打ち続けると思わぬ落とし穴に入ることがある。上司の言葉を掴み損ねたことを季語の湯豆腐に取合せをすると実に俳味があり滑稽である。

小豆粥 藤岡紫水

百までは生きるつもりと初笑ひ  
むらさきは万葉の色若菜摘む  
煮え立ちて色香めでたき小豆粥  
どんど果て大地に闇の腹ばへり  
寒月下雪が落せる雪の翳

初桜 沼田巴字

花蘇芳男つぼさは生れつき  
菜の花や老を重ねて好きになる  
牡丹のひらき初めしを風が揉む  
母子草鋏かつぎゆく母なりし  
世に慣れぬ初々しさよ初桜

雁の列 丸井巴水

極月やポストの舌が跳ね返る  
大玻璃を斜に切り込む雁の列  
初雪や一段ごとに足そろへ  
どの屋根もシート削つく雪催ひ  
冬空へ白煙すらり釈迦如来

初御空 植村蘇星

人は皆師なり高德福寿草  
一閃に払ふ黒髪歌留多取り  
師は一人鹿の子一筋初御空  
生かされて謝恩報恩年新た  
初御空天守煌煌麒麟来る

芽吹き風 北川孝子

息切れの走者を追へり芽吹き風  
自意識に少しゆれあふ二月過ぐ  
反省の積もる抽斗二月寒  
春の凍て胸に秘めおく事多き  
自己流の幸せに足り亀鳴けり

お飾り 直江裕子

橙を飾りつまらない朝がくる  
初春や扉の向かうにまたとびら  
囁きのやうに雪初む木暗れかな  
竹一本つきさしてある大冬田  
無防備といふ大枯野の罨

風便り 高木晶子

壇の蓋びたりと締り冬至来る  
崖下の景色も良しと年を越す  
風便りあれば上々ゆりかもめ  
初場所の星取表の真白な  
紅白梅日頃の道を忘れぬし

不老門 伊藤希眸

白梅を迎への華に実家帰り  
あらたまの庭にまあるき雀降り  
つくばひの氷ひの氷の日の夕べははが来る  
また厚き冬霧はがす蹄かな  
不老門ひたすら潜り雪を招ぶ

風倒木 奥田筆子

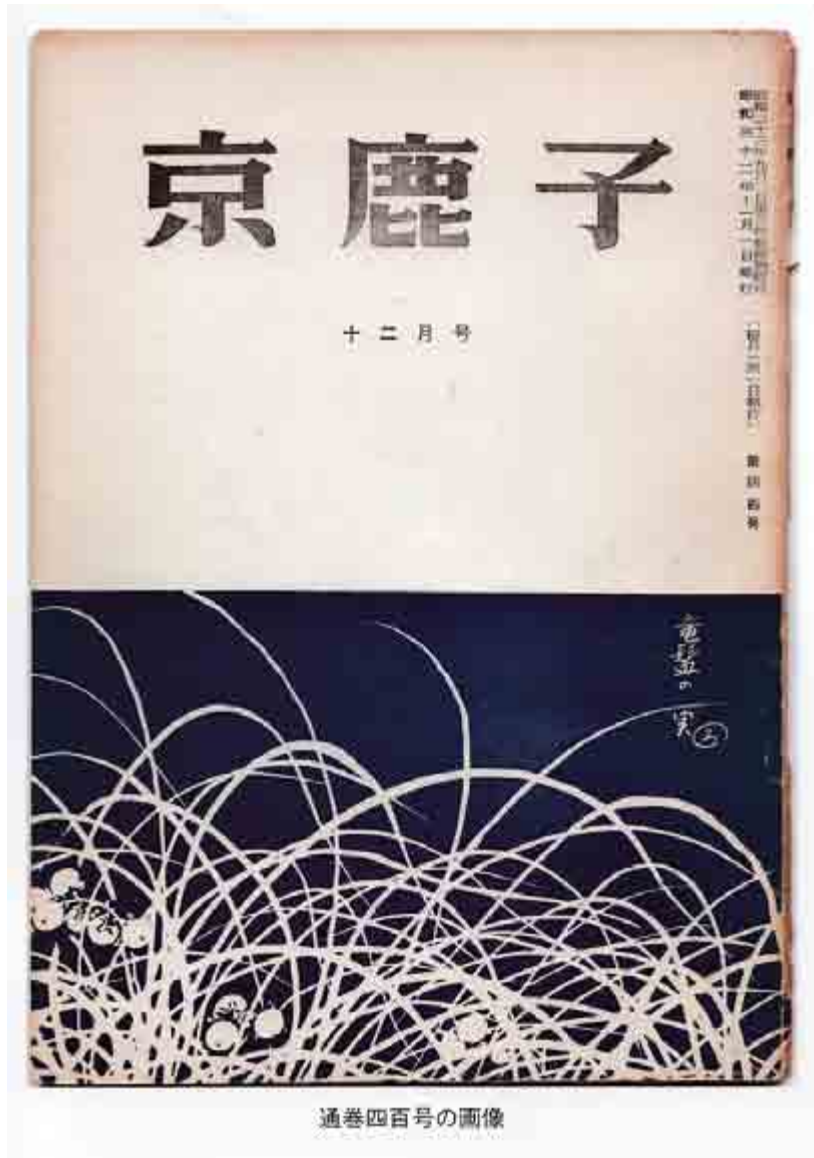
風倒木の火葬参詣者をぬくめ  
お正月貝殻撫でれば生き返る  
梟や振袖片方づつたたむ  
重箱の隅より春の闇つつく  
尺取虫のうしろについてこまで来

春帽子 井上菜摘子

むかし大部屋女優とふ春帽子  
山桜はるか昔を漂流す  
薄氷くぐもつてゐる号泣  
言ひ勝ちてこんなところに春の泥  
犬ふぐりたつぷり晴れて音沙汰なし

寒明ける 村田あを衣

恙がなき日々葉牡丹の七重八重  
ふる里の彩より合はす糸玉  
寒明けるはやばや達磨片目入れ  
煮凝りのゆつくり溶けて祖母育ち  
なはとびの大波小波跳べば春



通巻四百号の画像



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

たましひに沸点ありし冬紅葉  
山茶花の散る散る何を告げむとて  
毛糸編み自分史少し脚色す

地球救へと若者達は年惜しむ

無言劇見てゐるやうな福笑ひ

京都 井尻 妙子

冬蝶の身仕舞ベーターベン第九  
シャンパン抜く音に始まる年忘れ  
眉すこし整へて立つお元日

母のものの残る鏡台冬ひばり

初旅や逢うてときめく人のあて

城陽 鷺山 珀眉

松の内尉面の笑む太柱

若水や地球は青き水の星

六花秘仏の胸の厚さかな

少年の瞳をして独楽を廻しけり

梅いちりん利休好みし筒茶碗

七曜を笑うて泣いて懐手

口無しの瀬戸を一撃冬の雷

飯の世の晩節なれば北塞ぐ

煤払ふいづれ遺品となる一書

手鏡を芯まで磨き年迎ふ

福山 亀井 福恵

福知山 西村 白枿

初あかね郷鎮もりて紫に  
きらきらと舗装まばゆし初稽古  
紅一輪ゆれて惑はず冬さうび

大寒や野仏の目に涙あと

大吉と出てパスカルに初みくじ

初比叡かかはりきれぬものも抱き

冬の蝶翔ちてどこにも籍のなし

木枯しや笑ひ上手は生き上手

影もたぬ風の速さや寒に入る

冬木の芽一楽章の雲走る

寒夕焼両手に抱く胸あつし

寒紅や心の髪に炎ゆるもの

寒星のしづく鏝む巷の灯

福寿草肩寄せ合うて二人かな

岩をかむ紀伊の荒波寒ひびく

初鴉一声神意なる夜明け

令和への祈りを繋ぐ除夜の鐘

人日や夫の詩集にルビ一つ

菩提寺のひくき籬や石露あかり

銀杏落葉ひろふピエロの宙返り

大阪 本郷 公子

高槻 安田 優歌



月ヶ瀬 上田由姫子

短日や大空を掃く竹百幹

黄落や伽藍の影の華やげり

ままごとの婆は子役に実万両

折れてなほ我は我なり枯すすき

一人来て一席動くおでん屋台

鈴の音の神のお出まし初社

繋ぎぬく母校の襷三日かな

手を合はせ極見送る寒四郎

湯豆腐や掴み損ねるイエスマン

時雨傘儀式の後の大嘗宮

鄙宿の熾火の音色闇の中

囲炉裏端田舎言葉の心地よさ

御降りや縁は足し算ばかりなり

骨正月社訓繙く大番頭

数式を唱ふ左脳派受験生  
荒野には吾とコヨーテ冬銀河

アリゾナ 伊吹 之博